慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	政治算術の継承に関する一考察 : ベイコン, ペティ, ダヴナント
Sub Title	On the tradition of "political arithmetic"
Author	伊藤, 誠一郎
Publisher	慶應義塾経済学会
Publication year	1997
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.90, No.1 (1997. 4) ,p.89- 109
JaLC DOI	10.14991/001.19970401-0089
Abstract	
Notes	論説
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19970401-0089

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

「三田学会雑誌」90巻1号（1997年4月）

政治算術の継承に関する一考察

――ベイコン、ペティ、ダヴナント――

伊　藤　誠一郎

1　はじめに

「サー・ペティ氏は一六八五年の小さな手稿で，土地と労働との等式による，この平価の関係を政治算術上の最重要問題と考えている。だがこの研究は彼がついでに触れただけのものであって，風変わりで，しかも自然の規則からもかけ離れたものである。それはもっぱら彼が事柄の原因や原理に取り組まずに，ただ結果にのみ拘泥したためである。[(1)]」

「私は政治算術をあまり信用していない。したがって私は，これらの計算のいずれについても，それが正確であると保証するつもりなどはない。[(2)]」

これらの政治算術についての論評は，経済学説史上の政治算術の位置づけを推測させるのに十分である。これまでそれはせいぜい計量経済学のきわめて原初的な形としてみなされるか，[(3)] 初期の経済分析に関する科学的な試みの一つとして扱われるかであった。[(4)] たしかに政治算術は，直接的には後の有力な経済分析の方法の基礎とならなかったし，またそのような潜在的な可能性ももっていなかったかもしれない。

“科学的な”経済学をつくりだしたのはアダム・スミスであり，アダム・スミスはその方法においてニュートンの影響を大きく受けていた。ニュートン―スミスのラインは近代科学から“科学的な”経済学への方法の正統なる継承である。自然科学史上の勝者たる「ニュートンの方法」をとりいれ，これをもって経済・社会を分析したアダム・スミスこそが経済学説史における唯一のスター

（1）　Cantillon［4］pp.54-5．訳 p.29．

（2）　Smith［14］pp.534-5．訳第二巻 p.250．アダム・スミスが政治算術の計算が正確でないことをついているのはある意味では的確な批判といえる。例えばあとでダヴナントのところでみるようにダヴナントの政治算術はまさにその計算の正確さを最重要視していたためである。

（3）　Schumpeter［52］参照。

（4）　Letwin［44］参照。

ト・ラインである。これが“常識”とされてきたし，またそれを否定するわけではない。[5]

しかし，例えばアダム・スミスとならぶ経済学の始祖であるジェームス・ステュアートが，チャールズ・ダヴナントやウィリアム・ペティの政治算術を，もしくはそれに基づいた彼らの経済分析を多く利用しているように，[6] 政治算術は経済思想史上少なからぬ影響を与えてきたといえる。それどころか彼ら政治算術家はその方法に基づく多くの社会・経済分析を残し，当時においても後においても大きな影響を与えている。すなわち，十七世紀後半に“ベイコン主義者”ペティによって考え出され，“経済理論家”ダヴナントによって継承された政治算術という方法は，その時代には，単なる統計の道具ではなく，それ以上の特定の意味をもった経済・社会分析の方法であった。

政治算術は，1660年の王立協会の設立にその隆盛が象徴されるベイコン主義の影響のもとにつくり出された経済・社会分析の方法であった。しかし，今日の科学史でも経済学史でも，自然・社会科学の黎明期におけるベイコンおよびベイコン主義の役割はすっかり忘れ去られている。近代科学を確立させた科学革命のいわば勝者であるニュートンの影で，17世紀，すなわち政治算術が登場した時代に少なからぬ意義を科学史に残したベイコン主義は，ニュートンを近代科学の成立の指標とする今日の科学史の中ではほとんど重要な意味は与えられなくなっている。[7] 王立協会設立当初ロバート・フックによって押し進められた“ベイコンの実験哲学”路線による自然科学の成立は，やがてニュートンによって遮られ，廃れていった。[8] その様子は一世紀とたたない後に，『経済学原理』によってようやく学としての経済学の確立を成し遂げようとしていたジェームス・ステュアートが，事も無げにアダム・スミスによって葬り去られていく姿と重なり会う。そしてステュアートによって重用された政治算術は，スミスの登場によって経済学の歴史から忘れ去られていった。政治算術は確かに経済科学の確立をもたらすことはなく，ニュートン—スミスの影で埋もれてしまったが，ベイコン主義—政治算術というラインが17世紀に堂々と登場し，しかもそれが後の経済分析の歴史に少なからず影響を与えたことは事実である。本稿の目的はいわば「忘れられた」経済分析の方法

（5） ニュートンのアダム・スミスへの影響についてはすでにわが国の内外で多くの研究蓄積がある。たとえば Hetherington [35] やそこでとりあげられている文献，わが国では只腰 [24] やその巻末にとりあげられている参考文献を参照。

（6） Steuart [15] は第一編で人口と農業を論ずる中でペティとダヴナントの政治算術を彼らの名をあげながら利用しているし，また第四編や第五編での信用，公信用，租税について論ずるところでは彼がダヴナントをよく読んでいたことがわかる。

（7） Kuhn [43] は17世紀の科学革命を数学的伝統と実験的伝統という両面からみるが，通常前者，すなわち数学的伝統のほうが科学革命の正統とされている。例えば Butterfield [28] は「ベイコンがあれほど実験を重んじたにもかかわらずある意味では時代遅れであり，数学を欠いているということで十七世紀の批判を浴びたことも，うなずける」といって数学的伝統の正統を説いている。また Westfall [61] は17世紀の科学革命のなかに数学的伝統と機械論的伝統をみ，ニュートンにその統合，そして近代科学の成立をみる。いずれにせよ近代科学はニュートンを一大指標とする数学的伝統がその正統であり，ベイコンらによる実験的伝統はほとんど語るに値しないとされる。

（8） 中島 [20] を参照。

である政治算術を，「忘れられた」科学史上のコンテクストのもとで，すなわちベイコン主義との関連でもう一度検討することにある。(9)

これまでも政治算術は科学史との関連でしばしば語られてきたが，そのさい主にペティがとりあげられ，しかもその後の展開は論じられず，学説史の一エピソードとして扱われていた。しかしここでは例えばジェームス・ステュアートのような学説史上のビッグ・フィギューアがそれに大きな関心を寄せたという事実をも念頭に政治算術の再検討を試みたい。その際ペティの他に経済理論家ダヴナントをとりあげ，ペティから政治算術を取り入れながらも独自の政治算術論を展開していったあとをたどる。政治算術という言葉は18世紀になってからもしばしば用いられ，(10) これをペティとダヴナントのみで語りつくすことは到底できないが，ここではこの両者に焦点をしぼることにより，もう一つの自然科学から経済科学への流れをより特徴的に取り出したい。すなわち本稿のもう一つの目的はベイコン—ペティというこれまでにもしばしば論じられてきた継承関係のうえに，さらにダヴナントを付け加えることによってより深く政治算術の展開をみていくことにある。

そこではベイコン，もしくはベイコン主義の中にある二つの側面に注目し，その視点から政治算術の継承をみていきたい。その二つの側面とはベイコンの実験哲学の体系を完成させようとする側面と，ベイコンらのいう「旧哲学」批判の中に見いだされる思弁的方法への批判という側面（その裏には数量データを利用すべきとするきわめて積極的な主張が含まれているが）である。こうした二つの側面から，ベイコンやベイコン主義と政治算術家ペティとダヴナントの継承関係を再検討する。そして結論を先取りしていえば，ベイコンの実験哲学の完成という側面はペティまでで消え，思弁的な方法への批判という側面はダヴナントまで受け継がれる。(11) そしてその際注意すべきは元来ベイコンの実験哲学の一部分として成立した政治算術が，名誉革命後の政治的・経済的不安定という社会背景のなかでいまや政策決定の手段となったということであり，別の見方をすればそのことによって自然科学とは独立した経済分析の手段としての可能性をもったともいえよう。そして実際ダヴナントはそれを統治論というかたちで展開したのである。(12)

以下ではまず，ベイコンとベイコン主義の中からいま述べた二側面を抽出し，次にペティ，ダヴナントをとりあげそれらがどのようなかたちで展開していったのかをみていく。

---

(9) これまでもベイコン主義者・ペティについての研究は少なからずある。これについては3節を参照。

(10) Deane [29] 参照。

(11) ここで「思弁的な方法への批判」とは後で詳しくみるように数量データの重視，利用ということを意味する。「数量データの重視，利用」というこの視点からのペティやダヴナントの政治算術についての議論は Endre [32] を参照。

(12) ダヴナントの統治論に関しては伊藤 [16] を参照。本稿は拙稿 [16] の続編，もしくは補論として読まれたい。

2　ベイコンとベイコン主義[13]

十七世紀は危機の時代であり，それゆえにこそ多くの天才を生み出してきた[14]。この「天才の世紀」には，これまでも様々に哲学史，科学史からの検討が加えられてきた。実際この時期の天才たちは後の自然科学のみならず社会科学にも大きな影響を与え，その発展のプログラムを与えた。デカルトとベイコンはその代表である。その後の科学史において決定的な勝利を得たのはデカルトであった。デカルトに至り，そこからさらに発展していった機械論的，数学的伝統はイングランドのニュートンで確立し，その後長い間自然科学を支配することとなる。しかもその伝統はアダム・スミスを経由して社会科学の女王たる経済学にまでも行き渡ることとなった。とくに方法論においてその後の科学史でのデカルトの勝利，ベイコンの敗北は決定的なものであり，これを否定することは難しい。しかし問題なのは多くの科学史家が，デカルトとベイコンの登場した十七世紀という時期を振り返るときにさえこうした視点を持ち込んでいることである[15]。

これに対し最近の科学史研究は次のような見方を提示している。例えば科学史を科学の流布，制度的確立といったいわば科学の社会的条件で考える際，また理論の発展でなく一つの社会的運動の展開という側面からみるとき，この時期に忘れてならないのはむしろベイコンないしベイコン主義である[16]。実験主義や帰納法といった方法論の側面においてだけでなく，著書の英語（ラテン語ではなく）での記述や形而上学ではない日常生活に直結するような応用技術の研究の推進にみられる学問の世俗化，王立協会の設立に代表される学問の制度化など多くの点で，ベイコンやベイコン主義はその時代のシンボルであった。またベイコン主義者たちがベイコンから受け継いだものも彼の帰

---

(13)　フランシス・ベイコンにしろ多くのベイコン主義者たちにしろそれ自体として本稿の範囲で扱いきれる対象でないことはいうまでもない。ここでは本稿の展開において必要とされる限りにおいてのベイコンやベイコン主義者の研究であることを誤解のないようここにあえて記しておく。論拠や一次・二次文献に関しては文中，および注を参照されたい。

(14)　Hobsbawm ら［25］によるいわゆる十七世紀危機論争はこの世紀の科学史にも影響を与えている。Hill［36］はこの時代の科学史を論ずる前提として十七世紀を危機の時代として把握しているし，また佐々木［18］は十七世紀の社会経済史上の危機と科学史上でのパラダイムの移行を関連させている。またトマス［57］は「危機の時代」という言葉は用いないもののやはりこの時代に社会全般にわたる危機的状況を見いだし，その知的対応の中で宗教や魔術，そして科学をとらえようとしている。

(15)　注(7)を参照。また，Hunter［38］は chapter. 1 で今日からみた十七世紀のデカルト主義の偉業をたたえながらも，当時におけるベイコン主義の無視できない影響を指摘している。佐々木［18］［19］は危機の時代という社会史的背景のもとでのデカルト主義のパラダイムへの移行を論じているが，そのなかでベイコンを詳細にかつ適切にとりあげているものの，ベイコン主義とデカルト主義の葛藤についてはあまり触れていないように思われる。

(16)　十七世紀の王立協会をこのような視点からとらえたのがなによりも Hunter［38］［39］［40］である。

納主義という哲学上の方法論ではなく，彼の学問復興の精神と実験哲学の完成のための研究計画であった。[17] ベイコンの研究計画は彼の死後多くの人々によって受け継がれ，ハートリブ，コメニウスらがベイコンの研究計画を実行しようとさまざまに模索していたことはこれまでも明らかにされてきた。またこうした多くの試みが王立協会の設立に結実したことは周知のことといってもいいだろう。[18]

ベイコン自身に関しても最近の研究では，ベイコンの帰納主義者，論理学者としての側面よりも，学問の普及，振興という側面に重点がおかれている。ファリントン［33］は以下のように説明する。かつてのベイコン研究者は「好んでベイコンの著作の論理学的側面に注意力を集中し」[19]ていたために「帰納哲学の父」以上の説明をする事ができず，したがってベイコンの科学史上の地位も，影響も小さいものであるという結論に達してしまった。彼らはベイコンの諸著作のなかからおもに『ノヴム・オルガヌム』の，しかもその論理学に関わる部分だけを取り出してきた。しかしベイコンの「大志は，いまだかつて想像もされなかった規模において，自然的知識の発展や応用を体系化し，組織化するということであ」り，『ニュー・アトランティス』においてそれはユートピアとして描かれている。それはすでに初期の段階において構想されており，その考えは生涯を通じて変わらなかった。ベイコンの『大革新』はその「大志」を実践するための書物であり，『ノヴム・オルガヌム』はその『大革新』のなかの論理学という一部分にすぎない。ベイコンのやろうとしたことは単なる論理学の改革ではなく，人間による自然支配の復権であり，そこにこそベイコンの意義がある。[20]

ベイコンが若いときから生涯もちつづけたこの研究計画は，六つの部分からなり，その「著作の順序とプラン」は，それぞれ第一部には「諸学の区分」，第二部は「ノヴム・オルガヌム（新機関），もしくは自然の解明についての指示」，第三部は「宇宙の現象，もしくは哲学設立のための自然誌および実験誌」，第四部は「知性のはしご」，第五部は「先触れの走者，もしくは第二哲学の先取」，第六部は「第二哲学もしくは実践学」となっている。[21] ベイコンはこの全六部の著作『大革新』を完全なものとすることによって，彼の知識の体系，すなわち実験哲学の完成をみようとした

---

(17) Hill［36］が強調する，ピューリタン革命に至るまでのベイコンに代表される科学の特徴は，第一に基本的に大学ではなく独学で研究され，第二に商人や職人のために必要な技術が多くとりあげられ，第三にラテン語でなく英語で記述されたこととしている。また Hunter［38］［39］は十七世紀後半の王立協会の設立を通して，科学の確立の制度的側面を一貫して強調しているが，その際にもしばしばベイコンの影響を認め，いわばそのことを当然のこととしながら批判的検討を加えている。

(18) Hunter［38］［39］参照。コメニウスや，ハートリヴに関しては Syfret［56］や Turnbull［58］参照。

(19) Farrington［33］p.175．訳 p.228．

(20) Farrington［33］参照。こうしたベイコンをより体系的に，そして当時の歴史的環境のなかでとらえようとする研究は Rossi［50］などにも見られる。

(21) Bacon［1］参照。

のである。もちろん彼はこれを完成することはなかった。第一部が『学問の進歩』として刊行されたが，第二部は『ノヴム・オルガヌム』として記されたものの完成されたものではない。また第三部の執筆も部分的に試みられただけである。ベイコンの研究計画とは，当面のところベイコン主義者たちにとっては事実上第三部の「自然誌および実験誌」の作成を意味していたといえる。これがさきに指摘したベイコンから引き出される一つ目の側面である。

ところで，こうした構想は知識の改良，進歩（Advance of Learning）という考えに基づいており[22]，それはアリストテレスに代表されるこれまでの学問にたいする批判と表裏一体をなしていた。ベイコンによればこれまでの哲学は，内容のない言葉の研究や，結果の生じない思索や論争にふけっており，なんら新たなる知識の進歩はもたらさなかった。ベイコン自身『大革新』の「序言」で，「我々は論駁の勝利とか，古代の援用とか，権威の不当な借用とか，或いはまた不明の煙幕とかでこれら我々の発見に，何か威厳を与えたり持たせたりしようとは試みない」とし，「知識の真の目的を考えること，知識を……人生の福祉と有用のために求めること，それを愛のうちに成しとげ支配すること」をめざすとしている。彼にとってこうした思弁的な学問のやり方はなんら知識の進歩をもたらすものではなかった。彼は同様のことを『学問の進歩』の中で次のようにいっている。「学問においては，主として三つの無価値なものがあり，そのために学問がいちばん非難を受けるのである。というのは，われわれが無価値と考えるものは，偽り，あるいはくだらないもの，真理，あるいは効用をもたないものである。そして，われわれが無価値であると考える人々は，盲信するとか微細すぎるような人々である。」そしてその「三つの無価値なもの」，もしくは「三つの病気」とは，「第一に，妄想的な学問，第二に，論争的な学問，最後に，気どった学問である。むだな想像力，むだな論争，むだな気どりである。」[23]ここに思弁的な方法に対する批判という，ベイコンの第二の側面がみられる。

ベイコンには論ずるべき様々な側面があるが，ここにあげたベイコンの実験哲学完成のための研究計画とこれまでの思弁的な学問に対する批判という二点は，その後のいわゆるベイコン主義への継承という点で重要であり，したがってあえて指摘した。すなわちベイコン主義者たちがベイコンから受け継いだものは帰納法ではなく自然支配の復権へ向けての展望計画であり，「旧哲学」への批判的な精神であった。ハートリブ，コメニウスらがベイコンの研究計画の遂行をさまざまに模索していたこと，王立協会がベイコン主義と関わっていたことはさきに指摘した。「ベイコン主義者（Baconian）」という言葉は研究史上必ずしも明確な定義がされないまま使われてきたが，ここではいま述べたようなベイコンの意図，すなわち自然支配を目的とした彼の展望計画を推進し，そしてその観点からかつての論争に明け暮れた哲学を批判する人々と定義づける。これはまた最近の研

---

(22)　この時代の「進歩」概念とベイコンのそれについては花田［22］第2章参照。

(23)　Bacon［2］p.282．訳 p.271．

究史のなかでの用法と大きな隔たりはないであろう。

以下では王立協会の活動，目的にベイコン主義の典型をみ，それを紹介したSpratの“The History of the Royal Society”(1667) をたよりにベイコン主義の具体的内容を見ておく。この著作は王立協会から依頼を受けてかかれたものである。Spratは彼自身王立協会のメンバーであり，例えばBirch [26] の1664年3月30日の記事からは彼が「これまでに観察された自然のあらゆる現象とこれまでになされ記録されたあらゆる実験の収集」のための委員会に属していたことがわかる。[24] この著作にみられるSpratのベイコン主義的な記述がはたして事実であったのか，もしくは何らかの戦略があったのか，さらに王立協会自体のベイコン主義的立場への懐疑などをめぐって論争があるが，[25] ここではSpratの文面をそのまま読みとり，ベイコン，王立協会に代表されるベイコン主義，政治算術という系譜をたどる。

Spratの“The History of the Royal Society” [55] は，王立協会に引き継がれた当時のベイコン主義を端的に示しているといえる。この著作は三部で構成されており，第一部が哲学史，第二部が王立協会の設立過程と活動内容の説明，第三部が王立協会に対する批判への反批判となっている。まず第一部では哲学史のなかでベイコンへの高い評価がなされている。この哲学史はベイコンの実験哲学 (Experimental Philosophy) がその基礎となっており，すべてがこの視点にしたがって評価される。それによれば，東方では自然の観察が隠されてしまい，自然の哲学は発展せず，ギリシアでは高貴な言葉 (noble word)，話術 (Arts of Speaking) が実験 (Experiments) より重視された。原始キリスト教会では「知識は要求されない，論争好きの哲学 (Disputative Philosophy)[26]」がなされ，新発明や，実験はなかった。スコラ学派もすぐれているが，自然 (Nature) ではなく一般用語 (generall Terms) に基礎をおき，論争 (disputing) という方法ゆえに知識の拡大に適していない。ルネサンス期については，古代の哲学が再びかえりみられたことについては評価できるが，そこでの宗教論争や政治は実験哲学の障害になったとして批判される。このように新しい哲学であるベイコンの実験哲学の自然の観察，実験，新発明といった方法に対し，古い諸哲学の話術，論争，言葉という方法が批判されている。古い哲学に対して最近の哲学である，ゆっくり，確かな実験をする新しい哲学者の代表はベイコンであり，かれは実験哲学の擁護をしたとされている。さらにSpratは，ベイコンの著作はこの“History of the Royal Society”の「序文」にもっともふさわしいとし，この著作ならびに王立協会の立場，すなわちベイコンの実験哲学の擁護と推進という立場を明確にしている。Spratはここでベイコンがさきにみたその研究計画をすべてひとりでやろうとしたこと，そしてそれはひとりでは不可能であることを指摘するが，そのベイコンひとりで不可能だったこと

(24) SpratとこのBeの著作についてはHunter [38] (pp.27-8.) が端的な説明をしている。
(25) この論争についてはHunter [39]，Jacob [41] を参照。
(26) Sprat [55] p.12.

をするのがこの王立協会である。Spratは多くの人々，つまり王立協会のメンバーの共同作業（joint labours）による実験哲学の遂行をとなえる。かれはこのようなかたちで，王立協会をベイコンの研究計画の促進の場として考えていたことがわかる。

第二部では王立協会の設立過程と活動内容が説明される。ボイル，ペティ，レンらは空位期の狂気や熱狂を避けてオックスフォードで会合をもっていた。しかし1658年頃から多くはロンドンに移り，グレシャム・カレッジにあつまるようになった。その後かれらは1660年に王立協会を設立した。[27] そこでの目的は，「知りうる限りの自然（Nature）や人為（Art）の業すべてを確実に記録すること」すなわちベイコンの研究計画の推進である。これはさきにみた「大革新」の第三部である「自然誌および実験誌」に相当する。その研究方法の基礎はメンバー自身による実験であり，実験道具の多様さと，すばらしさ，そして通信という手段の利用が指摘される。題材は毎週の会合（meeting）で十分に吟味される。その手順は，まず実験，その結果に対する判定，原因の推量，改良，それらの論述である。そしてこれは完全な体系（compleat Schemes）としてではなく，未終了の歴史（unfinish'd Histories）として次の世代に伝えるための記録とされる。

ここには観念上の論争などの旧哲学への批判と，実験による自然誌の作成のためのデータ収集というベイコンの研究計画の推進というベイコン主義の具体的な内容，手続きが見られる。これはさきにあげたベイコンの二側面そのものの継承である。

ところでこうしたベイコン主義のなかでもその運動の積極的側面であるベイコンの研究計画の遂行，すなわちデータの収集という点に関しては問題が生じてくる。すなわち確かに多くの資料を集め，多くの実験をしたとしてもどの程度でそれが一般原理といえるものになれるのかがわからない。そもそもこの研究計画がベイコンの帰納法を前提としている限り，結局はベイコン自身その帰納法を完成させなかったという限界にぶつかることとなり，例えばベイコンの研究計画の内でも交易誌（History of Trade）に関しては十七世紀末には関心がもたれなくなってしまう。[28] ベイコンの研究計画の推進という積極的な意味におけるベイコン主義はペティの時代もしくは王立協会の設立前後にその絶頂をみ，それはニュートンの王立協会への登場とともに衰退していったし，王立協会自体ニュートンの影響が次第に強くなっていった。[29] 1690年代に登場するダヴナントの政治算術にはその意味でのベイコン主義の影響はみられないし，ダヴナント自身王立協会には加わっていない。[30]

---

(27) 王立協会の起源についても注(25)の問題とも関連して，多くの論争があるが，ここでは指摘するにとどめる。

(28) Hitroy of Tradeに関してはOchs［47］参照。また帰納法の問題に関しては，Shapiro［53］，Letwin［44］参照。Shapiro［53］によると王立協会は一般原理のような確実性（certainty）をあきらめ，単なる資料や実験の収集といった蓋然性（Probability）へと方針を変えた。

(29) Birch［26］には1671年12月21日の記事に初めてその名が登場する。またニュートンの王立協会における台頭，活躍はWestfall［62］，中島［20］を参照。

(30) Hunter［40］が整理したこの時期の王立協会の名簿には父ウィリアム・ダヴナントの名はある↗

3　ペティの政治算術とベイコン主義

ウィリアム・ペティの政治算術が，いまみてきたベイコン主義の影響のもとに考えられたものであることはすでに周知のことであるといってよいだろう。ペティについてはこれまでもさまざまな評価がなされてきた。例えばマルクス［45］による労働価値説の創始者としての評価は有名である。わが国における代表的なペティ研究者である松川［23］はペティを「イングランドにおける社会的生産力＝国富の増進を主題としつつ，……原始的蓄積の諸契機」を論じたとし，最近ではロンカリア［49］が価値と分配の理論の先駆者としてとらえている。しかし欧米ではかつてからベイコン主義者としてのペティ，そしてその政治算術は注目されてきた。最近では McNally［46］はペティを "Social Baconian" とし，ベイコン主義かつ共和主義的な思想をもった人々が農業を重視したというその代表例としてペティをあげている。また，Hunter［38］は学問の制度化という視点からベイコンの研究計画の一部としてペティの政治算術をとらえている。Deane［30］は科学革命の一翼としてのベイコンをとりあげ，それのペティの政治算術への影響を論じている。わが国でもすでに先に指摘したような視点からではあるが，松川［23］はベイコン主義者としてのペティを彼の生涯を追うなかで詳しく述べている。また芳賀［21］もベイコン主義者ペティを扱っている。いずれにせよ，程度に差はあるもののほとんどの論者はペティへのベイコンの影響は認めるところである。(31) 以下ではこうした研究史をふまえ，ペティ自身の一次資料や Birch［26］を利用しながら，前節のような視点でベイコン主義者・ペティを再検討していく。

彼がベイコン主義者であることはその著作においてとともに，活動においても示されている。彼の生涯（1623-1687）の大半はベイコンの研究計画の推進に捧げられたものであり，それはその内容についてのみならず，学問の制度面にまでわたる。(32) ペティのベイコン主義者としての活動はかなりはやい時期から始まり，1647年に書かれた "The Advice of W.P. to Mr. Samuel Hartlib of the advancement of some particular parts of learning"［10］にはベイコンの「学問の発達（Advancement of Learning）」の「ある特定箇所（some particular parts）」をすすめるための学院（college）の設立が提案されている。これはさきにあげたベイコン主義者たちの運動の典型的なも

↘が，チャールズ・ダヴナントの名はない。

(31)　その一方で Kargon［42］のように彼の数学重視の姿勢，いわばデカルト主義的な側面を見たり，Skinner［54］のようにホッブスの弟子としてのペティをとりあげたりするものもある。Buck［27］は当時の政治的・社会的不安定さの中での統治の手段として政治算術をとらえるが，その際ペティの統治論への影響をホッブスからのものとしている。これに近い意味でのホッブスの影響を認めたものに Endre［32］がある。

(32)　ペティの経歴については Fitzmaurice［34］，Hull の Introduction（Petty［8］），松川［23］などに詳細に書かれているのでここでは必要な範囲で触れることとする。

のであったといえる。[33] ここではベイコンの研究計画の一部としての教育が明確に意識されている。ペティがこの "Advice" の冒頭でいうには，「学問もしくは学問の厳密な定義や優れた分類は（偉大なるベルラム卿によってすでに非常に的確になされているので）われわれはしない」[34] で，ここでの目的はその一部として教育について論じることとされている。ここで提案されているカレッジ設立の案はベイコンの『ニュー・アトランティス』に登場する「ソロモン学院」の実現の為の案としてしばしばこれまでも指摘されてきた。「ソロモン学院」とはベイコンの新哲学（実験哲学）の推進のための学院であり，ペティ以外にもさきに指摘した人々によって多くの案がだされていた。

その後の彼の活動の大部分は王立協会に関わるものであった。さきに Sprat の "History" の説明のなかでもみたように，彼はオックスフォードにおける王立協会の前身のひとつであったグループのメンバーでもあり，王立協会の設立後は当初から彼の死の年までその中心的人物のひとりであり，積極的な活動をしていた。[35]

Birch の "History of the Royal Society" [26] にはペティの王立協会における活動が記録されている。[36] それによると彼は多くの実験などにたずさわるとともに，様々な組織運営にも関わっている。1664年の記録にある委員会（committees）のリストによるとペティは「機械に関する，すべての機械の発明の考察と改良に関する（Mechanical, To consider and improve all mechanical inventions)」と題されたものと，交易誌のための（For Histories of Trade)」と題されたものに所属していたが，[37] 彼の関わった――自らの提案によるものにせよ，王立協会の要請によるものにせよ，他人の実験への参加などにせよ――研究活動をみるとそのほとんどは自然科学の分野に属するもの，特に技術の開発に関するものが多かった。自然科学や技術に関するものの題材としては，船の改良，造船誌（the history of building of ships)，衣服（clothing)，白鉛精製の実験，アイルランドの自然，重力，ウェールズの岩石，染色，振り子の実験，音楽，交易，二重底船（double-bottomed ship)，[38] 諸木材の耐久性，ワインの評価，潜水，風速，大砲の改良，戦車の改良，犬の血についての実験，磁石の強度，二乗法と平方根，[39] 天文観測機，火薬（gun-powder)，イガマメとクローバー栽培と土

---

(33) 松川 [23] はこれを『教育論』と訳してとりあげて詳述している。また芳賀 [21] もこれをベイコンとの関連でとりあげている。

(34) Petty [10] p. 1.

(35) Birch の "History of the Royal Society" [26] は奇しくも，ペティの死んだ年，1687年までで終わっている。

(36) Birch の "History" [26] はおもに王立協会の Register Books をまとめたものである。またここからペティの活動を読みとる際に Scala [51] の作成した "History"の索引を利用した。

(37) このリストは Birch [26] vol. 1, pp.406-7. にある。王立協会の committees については Hunter [39] の chapter 3 を参照。

(38) 1662-3年にアイルランドからこの "his new ship" についての研究成果が逐一手紙で送られロンドンの王立協会で読まれた。

(39) 1674年11月26日に提出された二乗と平方に関する "discourse" は同年12月10日に印刷すること ↗

壌の種類，海水，樟脳，鉛，窒素の化学実験，アイルランドの石版の種類，陸上輸送，鉱水，航海など非常に多岐に渡っていた。なかでも彼は王立協会設立当初から船の改良に特に熱心で，晩年になってなお1684年12月18日の手紙のなかでペティは「私は私の人生を，あらゆる機械のなかで最も偉大で壮大なもの，船の検討に費やすつもりだ」(Birch [26] vol.4, p.351.) といっている。(40) また，政治算術との関連で注意しておきたいのは，1683年3月14日のPlotという人物による鉄の分類について，ペティはその基準 (criteria) について注意を述べたという記事である。その記事のなかに次のように記録されている。「読まれたものの中に「よりずっと大きい (considerably bigger)」という言葉が使われていたが，サー・ウィリアム・ペティは数，重さ，尺度を示すもの以外の言葉は使ってはならないと警告した。」(Birch [26] vol.4, p.193.) のちに政治算術の基準として説明される「数，重さ，尺度」がここでは自然に関する研究の中でも登場する。

それに対して政治・経済に関わるすなわち，自然体 (body natural) に対して政治体 (body politic) に関わる彼の記事はごくわずかである。彼は交易誌の委員会に入っていたにも関わらずである。死の前の年である1686年12月22日にペティの『ロンドンとパリの規模，富，人口の比較に関する政治算術の試論』についての記事がある (Birch [26] vol.4, p.513.) のがせいぜいのところである。

もうひとつ王立協会における彼の活動のなかで重要なのは組織運営に関するものである。Birch [26] の記事からは彼が会計，講義の開設，会費の支払いと延滞金の問題，会計監査，記録帳の整備などに関与し，また彼はしばしば評議会 (council) のメンバー (1664年，1666年，1671年，1673-4年，1679年，1687年に任命を受けている) にもなったことがわかる。王立協会の "design" の問題にも深く関わり，1662年には，王立協会の構想に関する試案を作成する為の委員会に指名され，1665年には，Spratによる王立協会の設立と構想に関する叙述 (Spratの "History" のこと) の見直しのための委員会に指名されている。さらに1674年にはクリストファー・レンとともに副会長になり，王立協会を活気づけるための対策と会費支払いの問題にとりかかる。1684年11月3日のダブリンの王立協会の議事録にはペティが新しい会長として記録されている (Birch [26] vol.4, p.341.)。彼の王立協会に対する熱意は衰えず，1684年6月18日に，ダブリンの王立協会の1684年6月7日の議事録が読まれ，そこから「光を失なっているにもかかわらず」(Birch [26] vol.4, p.306.) なお彼が活動

↘が指令されている (Birch [26] vol.3, p.156, p.160参照)。これが "The Discounse" [13] である。

(40) 例えばこれを当時のいわゆる重商主義政策と結びつけることができるかもしれない。例えば彼は大砲に使う火薬にも関心がある。Wallerstein [60] もいうように当時オランダの漁業，制海権にみられるように船舶の改良は政治的・経済的に重要であった。ペティもこうした "重商主義" 的視点があったといえるかもしれない。実際彼は『政治算術』[12] でオランダの国力について強い関心を抱いており，詳細に分析を加えている。しかしBirchの "History" を通じてみると本文にあげたように彼の関心は多岐に渡っており，彼の王立協会に属する科学者としての姿勢に何らかの国家政策的意図が強くあったとはいいかねる。

していたことがわかる。

このように Birch [26] の記録からベイコン主義者としてのペティの活動がわかる。[41] 彼は生涯をかけてベイコンの研究計画の推進に尽力し，そこにはいわば積極的な意味におけるベイコン主義，すなわちベイコンの実験哲学の体系を完成させようという意味でのそれがみられる。それは狭義での実験哲学そのものだけではなく，王立協会の運営という学問の制度面にまでわたる。それは彼が狭義の，そして厳密な意味におけるベイコンの実験哲学の完成を目指していたからであり，さらにいえば彼がベイコンの「ソロモン学院」を心に描いていたからである。

ではこうしたベイコン主義者ペティは政治算術をどのようなものとして考えていたのだろうか。

> 「サー・フランシス・ベイコンは，かれの「学識の進歩」のなかで，自然体と政治体とのあいだに，また両者が健康と力とを保持する諸方法のあいだに，いくつかの点について賢明な類比をおこなった。そして，解剖が一方のものの最善の基礎であるのと同じく，他方のものについてもまたそうであるということ，また，政治体の均整，構成組織，および比例を知ることなしに政治を処理するのは，老婆ややぶ医者の治療のように不確実なものであるということは，いずれも（ベイコンの考えと）同様に道理にかなったことである。[42]」

これは『アイルランドの政治的解剖』の「著者の序」からの引用である。ここでは "The Advice of W.P." のときと同様に，ベイコンの「学問の発達（Advancement of Learning)」の「ある特定箇所（some particular parts)」としての，すなわちベイコンの研究計画の推進としての，政治体の「解剖」が目的であることがわかる。ここにさきにあげたベイコン主義者としての一側面が示される。

ペティは『政治算術』のなかで彼の方法を次のように説明している。

> 「私がこのことをおこなうばあいに採用する方法は，現在のところあまりありふれたものではない。というのは，私は，比較級や最上級のことばのみを用いたり，思弁的な議論をするかわりに，（私がずっと以前からねらい定めていた政治算術の一つの見本として，）自分のいわんとするところを数・量または尺度を用いて表現し，感覚にうったえる議論のみを用い，自然の中に実見しうる基礎をもつような諸原因のみを考察するというてつづきをとったからであって，個々人のうつり気・意見・このみ・激情に左右されるような諸原因は，これを他の人たちが考察するのにまかせておくのである[43]」。

---

(41) "The Petty Papers" [9] からも積極的な意味におけるベイコン主義者・ペティの研究活動をみることができる。ここには，編者であるランズダウン侯爵の分類にしたがえば，政治，ロンドン，アイルランド，宗教，人口統計，トレイド，利子，教育，哲学，軍隊，羊毛，医療などについての記述がある。Birch [26] からは彼のむしろ "body natural" の研究に関する活動がみられたが，ここでは "body political" についてがみられる。

(42) Petty [11] p.129. 訳 p.21.

(43) Petty [12] p.244. 訳 p.24.

この部分だけでもすでにSpratのいう実験哲学の特徴は明確にあらわれている。ペティは「比較級や最上級のことばのみを用いたり，思弁的な議論をする」ことや，「個々人のうつり気・意見・このみ・激情に左右されるような諸原因」を批判し，自らは「数・量または尺度を用いて表現し，感覚にうったえる議論のみを用い」るというが，これは“History”のとくに第一部の哲学史のなかにみた旧哲学に対する批判を思い起こさせる。すなわちここでペティが批判しているものはSpratが古い哲学の方法として批判した話術，論争，言葉といったものであり，さきにとりあげたベイコン主義の二つの側面のうちの旧哲学への批判という側面が見える。この「数・量または尺度」を用いる方法はBirchの“History”のなかでは「自然体」の議論にでてきたが，ここでは「政治体」についての議論ででている。そして彼が採用する方法とはSpratが新しい哲学（=ベイコンの実験哲学）の方法として擁護した自然の観察，実験，新発明といった方法である。

ペティはさらに続ける。

> 「……もし，これらがまちがっているにしたところで，それをもとにしてなされている議論がそのためにこわされてしまうほどのものではなく，どうまちがっていても私がねらいさだめているあの知識への道を示してくれる仮説としては十分なのである。そのうえ私は，現在のところ十個の主要な結論を詳述するにとどめておいた。もし将来，この十個の結論が緊要なりと判断され，一層十分に討議するねうちがあるということになるならば，私は，独創的にして私心なき人士のすべてが，これらの推論の基礎をなす諸命題のどれかに発見されるであろう諸々の誤謬・欠陥および不備を是正されることを希望する。のみならず，私人の努力をもってしては到達しえぬこれらの事項の真実を明らかにするということは，政府当局自身の仕事としても，けっしてふさわしからぬものではないであろう。[44]」

「あの知識への道」とはベイコンの研究計画のことである。しかしこの体系は「未終了の歴史」なのであり，そこではつねに「誤謬・欠陥および不備を是正」しなければならない。「私人の努力をもってしては到達しえぬこれらの事項の真実を明らかにするということ」は，ベイコンひとりによってもやはり不可能であったことであり，この「政治算術」もベイコンの研究計画の一貫としてさきにみたSpratがいう「共同作業」の必要がある。

このようにペティの政治算術は，Spratによって説明されたベイコンの実験哲学の一部をなしていた。そこではさきに指摘したベイコン主義の二つの側面，すなわち旧哲学への批判という面と，ベイコンのプログラムの推進という面がみられた。そしてチャールズ・ダヴナントは確かにこのペティの政治算術を継承することになる。しかし，そこではすでにペティの政治算術を生みだしたベイコン主義の精神を見いだすことは困難となっていた。

---

(44) Petty [12] p.245. 訳 pp.25-6.

4　ダヴナントによる政治算術の継承

ペティが死んだ1687年から，ダヴナントがその『公収入交易論』［5］で政治算術を自らの政治・経済分析の方法として確立した1697年までの十年間は，政治算術という方法の目的や内容を変えるには十分に激動の年月であった。それは来るべきウォルポールの政治的安定にむけた時期の中で最も不安定な年月であった。名誉革命をはさんだこの十年間の不安定さは単に政治的なものだけではなく，経済的なものにまでわたった。議会ではいわゆる名誉革命体制の確立をめぐって激しい政争が繰り広げられ，他方名誉革命がもたらした長きにわたる戦争は，直接的には戦費調達，広くは通貨，交易，税制，公信用制度などさまざまな問題を引き起こした。それは政治的にも経済的にもきわめて不安定な状態であった。(45)

そうした不安定な状況下で事態を改善するためによい統治をする手段として政治算術を用いようとしたのがチャールズ・ダヴナントであった。(46) 確かにペティにも同様に統治の手段としての政治算術という考えがなかったわけではない。後にみるダヴナントのペティ批判からもわかるようにペティの政治算術は実際チャールズ二世によって利用された。またペティ自身次のように述べている。「国家の一員たる私は，まずもって共同の利害がどのような状態になっているかについて刻明な真実を知り，つぎにいっさいの疑わしいばあいには，その最善を考えようと思う。(47)」ペティも国家の利害を考え，その改善をすべきと思っていたといえる。しかし，先にみたように，ペティの場合その政治算術の目的，手段はなによりもベイコン主義のそれであり，またそのようなものとして考え出されてきた。(48) それに対してダヴナントの場合よい統治をして一国の政治的・経済的改善をはかることが目的であり，政治算術は単なる手段にすぎなかった。ペティとダヴナントでどちらの社会背景が安定的であったかといえばどちらとも言い切れないが，いずれにせよ両者のあいだには政治算

---

(45)　この時期の政治的安定性の問題についていては Plumb［48］をはじめ多くの研究がある。また経済の問題に関しても多くの研究があるが，Dickson［31］がいう「財政革命」(Financial Revolution) は基本的な視点といえる。

(46)　ダヴナントの統治論については拙稿［16］を参照。したがって，本稿ではこれを前提としているが，ここではその説明の繰り返しはさける。また，政治算術についての研究史について大倉［17］を参照されたい。

(47)　Petty［12］p.241 訳 p.18.

(48)　注(31)のなかで指摘したように，Buck［27］はむしろペティの中に不安定な状況下での統治の手段としての政治算術を見いだそうとしており，そこではベイコンよりはホッブスの影響が強調される。Endre［32］も社会の不安定性とペティやダヴナントの政治算術の関連を認めている。また実際 Skinner［54］も指摘するようにペティはホッブスの「弟子」でもあり，一概にベイコン主義者ペティのレッテルをはることはできないが，ここではその政治算術という方法にのみ限ってみれば，ベイコン主義者として語ってもいいように思える。例えば Deane［30］はペティをベイコン主義者としてとりあげ，そのうえでかれの政治算術の統治への利用を評価している。

術を手段とする第一の理由に決定的な違いがあったといえる。一方はベイコンの実験哲学完成の手段であり，他方はよい統治をするための手段であった。

ペティの政治算術を（批判的ではあるが）継承したダヴナントではあったが，ベイコンの研究計画の推進という側面でのベイコン主義の特質を見いだすことはできない。例えばさきに指摘したようにダヴナントは王立協会にも入っていないし，また彼の活動にベイコン主義者としてのものを見いだすことはできない。(49)

ダヴナントはグレゴリー・キング（Gregory King）の資料を紹介した『貿易差額改善論』のなかで次のようにいっている。

> 「医術（physic）の技術がいまや完成したのか，それともさらなる改良ができるのかということについてはここでいわない。しかし，腱，筋肉，動脈，静脈の知識ならびに最近の血液の循環の発見と，すべての解剖が，この未知の学をより分かりやすく確かなものにするのに非常に役立つ，ということは断言しても差し支えないだろう。
>
> 政治体や，その真の構造，その健康状態，その成長と衰退，その強さと弱さ，そしてさまざまな起こりやすい伝染病への救済策をどう求めるかといったことを理解するために同様の方法で，国家のすべての個々の部分，そのトレイド，（その血液である）流通貨幣，技芸，労働，手工業，人口について研究し詳細にみなければならない。」（[6] pp.169-170.）

ここにはさきにみたペティによるベイコンの自然体に対する方法の政治体への応用の影響がみられる。ペティは前節の引用でみたように，『アイルランドの政治的解剖』のなかで自然体の解剖の政治体への応用を試みることを述べ，さらにつぎのようにも続けている。「解剖というものは，たんに医者のみに必要であるばかりではなく，いやしくもものの道理を知ろうとするほどの人であれば，誰もがわきまえていてよいことであるから，けっして政治を職業としている者ではないが，ものを知ろうとする熱意のために，政治的解剖について最初の詳論を自由に試みてみたのである。」(50)
こうしたペティの自然体に対する医術と政治体に対する政治算術の比較はダヴナントへ影響し，先の引用のようなかたちになって表現されたといってよいであろう。しかし，ダヴナントはこれをベイコン主義のコンテクストで述べたのではない。ペティは自然体，政治体両者の解明をベイコンの研究計画の一貫として並列的にとらえていたのに対し，ダヴナントは自然体に対して用いられた方法の政治体への応用として別個のものとしてとらえている。ダヴナントの関心はあくまでも政策的なものであり，政治体のデータの収集はそのためのものにすぎない。ダヴナントがペティを評価したのもこの自然体に対する方法の政治体への応用という点にある。ダヴナントは次のようにいって

---

(49) 彼の経歴については Waddell [59] を参照。

(50) Petty [11] p.129. 訳 p.22.

いる。「そのやり方自体は，疑いなくかなり昔からある。しかしそれの，公収入や交易といった特定の対象への応用は，ウィリアム・ペティ卿が最初にやり始めたことであるが，今までのところほとんど誰もかれに追随することはなかった。かれは，初めてそれに名前をつけ，そしてそれを規則や法則にした」([5] p.128.)。

ダヴナントによる政治算術の定義づけは次のようなものである。「我々は，政治算術を，統治に関する諸事情について算術によって論じるやり方と考える」([5] p.127.)。そしてその政治算術を用いるべき統治者を次のように説明する。「統治者 (minister) の能力はおもにこの計算能力 (computing faculty) にある。戦時も平時も，事態を数字で理解することなしにうまくやっていくことはできない。……したがって，偉大な為政者 (Great statesmen) は，その国の正確な情勢を知ることのみならず，戦争または同盟関係にある国の人々の力量や弱点を同じく完全に理解しておくことに，常に気をつけてきた。そして，そこから形成される判断が，政治算術なのである。」([5] p.131.)

さきに指摘したように，ダヴナントやキングが活躍した当時イングランドはウィリアムの戦争下にあり，その戦費調達のためにさまざまなデータが必要とされ，政治算術を利用しない手はなかったといえる。(51) 戦費調達のためにはまずイングランドの国力を知る必要がある。ダヴナントによれば「全国民の富は人々の労働と勤勉から生じてくる。それゆえ一国の国力や強さを判断しようとする場合，その国の人口についての正確な知識が必要となる。」([5] p.138.) ダヴナントが政治算術を必要とする理由はここにある。したがって彼が必要とする政治算術が意味するものは，この「正確な知識」を得るための「計算能力」となる。それゆえに次のような政治算術の説明がなされる。「偉大な統治者は，あらゆる種類の人々から意見をきき，その国，その力量，強さ，トレイド，富，そして収入の全般的な形状を熟慮することによって，……健全な判断をし，正しい助言を与えられるのである。そしてこれが我々が政治算術によって意味するものなのである。」([5] p.135.) ダヴナントにとって政治算術は為政者が用いるよい統治のための手段であり，データの収集は決してベイコンの実験哲学の完成のためではなく，戦費調達等の政策決定の資料としてその意味があった。つまりダヴナントはペティと同じ様な意味においてベイコン主義者だったのではない。

とはいえダヴナントまさにこの正確なデータの収集という意味においてはベイコン主義のもう一つの側面の影響を強く受けているといえる。ダヴナントは政治算術をたしかにベイコンの実験哲学の一部をなすものとして考えてはいないが，彼もベイコンやベイコン主義者が旧哲学の方法としてきらった思弁的な方法をきらい，より正確な事実を必要としていた。そのために政治算術を用いたのであり，その意味でダヴナントもベイコン主義を一面においてたしかに継承していたといえる。

このことは皮肉にもダヴナントのペティ批判のなかでよくあらわれている。ダヴナントによると

---

(51) こうした戦時下での諸データの必要と政治算術に関しては Holmes [37] 参照。

ペティの政治算術の「基礎は，人口についての十分な知識にある。しかし，かれはそのすべての研究において，関税や国内消費税や炉税を指針と見なしたが，そうした諸収入の説明は十分にせず，また，かれが諸著作を書いた時点において，それら諸収入の取り高も，かれにはわからなかった……。主な概略は，これら3部門の正確な額が充分にわかる前に計算された」のである。ダヴナントによればペティ自身が，実際の「正確な額が十分にわかる前に」結論を出していたのであり，すなわち実験や観察なしに知識を得ようとしているのであり，ベイコン主義者やベイコンが批判した思弁的方法を用いている。「実践や経験によって啓発も支持もされていない，小室での思弁（speculations）が，その国の状態を知りたい人によって非常に不確実な道標となることは確かである」（[5] p.135.）とは，きわめてベイコン主義的ないいまわしである。ここではベイコンやベイコン主義者が「小室での思弁」を旧哲学として批判し，彼らの実験哲学では実験や観察から得られたデータに基づくべきだとしたベイコン主義の一面を読みとることができる。

ベイコンやベイコン主義者はこうした思弁的方法を，具体的には話術（arts of speaking）とか論争（disputing）として批判したが，ダヴナントも政治史とのからみあいのなかでではあるが，やはり話術（art of speaking）とか雄弁（eloquence）を警戒し，批判する。ダヴナントは1696年に書いた "Essay on Publick Virtue" という草稿を残している。(52) そのなかで彼はアテネの自由が失なわれたのは雄弁家（Orators）とその煽動によるとしている。革命後のイングランドの場合も同じで，話術は事態の真相を隠し，罪悪を弁護し，国を滅ぼすことで自らの富を増やそうとする人々を助けてきた。雄弁は確かに政治に便利な道具であるが，徳のない人が用いれば害をもたらすし，話術は勇気と用心をともなうときはよい結果をもたらすが，不当な野心をともなえばいっそう悪い結果をもたらす。したがって有能な為政者は，雄弁や美辞麗句（Oratory and fine Words）をもって人々に害を与えるようなことがあってはならない。しかしダヴナントの時代においては，お世辞を使う人々（flatteres）によって政治が腐敗してしまった。(53)

この文脈でダヴナントがいおうとしているのは，政治は雄弁や話術によるのではなく，正直さや徳（Honesty & Virtue）に基づくべきだということなので，政治算術と関わりがないように見える。しかし『公収入交易論』の彼の政治算術に関する説明をみればわかるように，ダヴナントのこうした話術や雄弁とか甘言（flattery）に対する批判はかれが政治算術を必要とする直接の理由でもあった。ダヴナントは自分の政治算術をペティのそれを批判することでより明確に特徴づけようとしているが，それはペティの "flattery" に対する批判であった。ダヴナントにいわせればペティは為政者に対して正確な情報を伝えず，為政者にとって好都合なことを知らせていた。すなわちフランスの脅威や戦況が好ましくないことをチャールズ二世にしらせなかった。「チャールズ二世は，

(52) "Essay on Publick Virtue"については拙稿［16］を参照。
(53) Davenant［7］p.185以下参照。

この事に関する計算についてのウィリアム・ペティ卿の評価を見て非常に喜んだ……。しかし，我々は今，この偉大な天才がこれらの全ての主張において誤りを犯しているという明白な根拠を持っている。すなわち我々が考える根拠というのは，ペティは，本心で語っていたのではなく，むしろ御機嫌取りをしていたということである。／王は，フランス軍がそれほど手ごわいものでなく，また決して王国に害となるようなことはないといってお世辞を使う（flattering）ような council によっておだてられて喜んでいたのである」（以上［5］p.130.）。先にもみたようにダヴナントにとって有能な為政者とは政治において正確で健全な判断をする事ができる人であり，それは政治算術によって得られた正確な情報があってこそ可能となるのである。ペティは正確な情報ではなく甘言という不正確な情報を与えたのであって，ダヴナントの立場からみればペティは政治算術家としては適格とはとてもいえなかったのである。

ダヴナントが政治算術というときいかに正確な情報の獲得という点を重視していたかということは次のことからもわかる。ダヴナントは『貿易差額改善論』のはじめに，話すこと（speaking）と書くこと（writing）を別々の才能とし，前者はすばらしい才能であるが，それはなんの準備もなく話すことができる才能としている。それに対し後者の才能をもつ人は正確さを保持しようとするとしているので，その際の用心が自信のなさをもたらすとする。当然彼は後者，書き手（writer）であり，正確を期そうとするのである。(54) ここで彼が二つの才能をわけて説明するのはさきの雄弁や話術に対する批判と同様，そのこと自体というよりは，そこに含まれる不正確な知識とそれによってもたらされる誤った判断を批判するためであるといえる。ここにも正確な情報の収集というダヴナントの政治算術に一貫した姿勢がよみとれる。

5　おわりに

以上が，ベイコン主義の伝統という「忘れられた」科学史のコンテクストにおける「忘れられた」経済分析の歴史としての政治算術の再考察である。ここではベイコンないしベイコン主義者の主張から，ベイコンのプログラムの推進という面と，話術や論争といった思弁的な科学の方法に対する批判という面の二面を抽出しそれを軸にペティとダヴナントにおける政治算術の継承関係をみてきた。結論は今みたようにペティは両方の意味でベイコン主義者であったのに対し，ダヴナントでは少なくとも前者の意味においてベイコン主義者とはいえなかったが，思弁的な方法を批判し正確な情報の収集を重視するという点でベイコン主義の特徴がみられる。この後者の意味におけるベイコン主義の継承こそがペティからダヴナントへと続く政治算術において最も肝要な点であった。こうした視点からみることによって，ベイコン—ペティ—ダヴナントという三者の継承関係や，ダ

(54)　Davenant［6］p.168参照。

ヴナントの政治算術史における位置づけがより明確になってくる。この継承関係の中においてこそ，積極的に，より体系的に政治・経済の諸問題に対処してきたダヴナントを正確に評価することができると言っていいだろう。ペティの政治・経済に関する諸論点がそれぞれに画期的な，また重要な意義をもちながらも，結局のところ彼の政治算術はベイコンのプログラムの一部にとどまったが，ダヴナントに至ってより正確なデータの収集とその政策への利用ということがより前面にだされてきた。ここにこそニュートン—スミスの方法の継承とは異なった政治算術という経済分析の方法の意義が見いだせよう。

（市立大月短期大学専任講師）

参 考 文 献

[1] Bacon, F., Novum Organum, 1620, in *The Works of Francis Bacon*, ed. by J. Spedding and R. L. Ellis and D. D. Heath, 1858, London（以下 *Works* と省略), Vol.1. 桂寿一訳『ノヴム・オルガヌム』岩波文庫，1978年。

[2] Bacon, F., Of the Proficience and Advancement of Learning, Divine and Humane, London, 1605, in *Works*, Vol.3. 成田成寿訳「学問の発達」『世界の名著，ベーコン』中央公論社，1979年，所収。

[3] Bacon, F., New Atlantis, in *Works*, Vol.4. 成田成寿訳「ニュー・アトランティス」同上訳書所収。

[4] Cantillon, R., *Essai sur la nature du commerce en general, Traduit de l'anglois*, London, 1755. 津田内匠訳『商業試論』，名古屋大学出版会，1992年。

[5] Davenant, C., Discourses on the Publick Revenues and on the Trade of England, first part, 1697, in *The Political and Commercial Works of that celebrated Writer Charles D'avenant, LL. D./ Relating to the Trade and Revenueof England, the Plantation Trade, the East-India Trade, and African Trade./ Collected and Revised by Sir Charles Whitworth./ In Five Volumes*, London, 1771（以下 *Works* と省略する), Works, vol.1.

[6] Davenant, C., An Essay upon the Probable Methods of Making a People Gainers in the Balance of Trade, in Works, vol.2. second part, 1698, in *Works*, vol.2.

[7] Davenant, C., Essay on Publick Virtue, 1696, in *Manuscript No.60*, in University of London Library.

[8] Petty, W., ed. by Hull, *The Economic Writings of Sir William Petty*, 1899.

[9] Petty, W., ed. by Marquis of Lansdowne, *The Petty Papers*, in vol 2. London, 1927.

[10] Petty, W., *The Advice of W.P. to Mr.Samuel Hartlib of the advancement of some particular parts of learning*, London, 1647.

[11] Petty, W., The Political Anatomy of Ireland, London, 1672, in *The Economic Writings of Sir William Petty*, Edited by C. Hull, 1899. 松川訳『アイァランドの政治的解剖』岩波文庫，1951年。

[12] Petty, W., Political Arithmetick, 1690, in *The Economic Writings*. 大内・松川訳『政治算術』岩波文庫，1955年。

[13] Petty, W., *The Discourse Made before the Royal Society*, 1674.

[14] Smith, A., *An Inquiry into the Nature and Causes of the Wealth of Nations*, London, 1776. ed. by W. B. Todd, in 2vol., Liberty Classics, Indianapolis, 1976. 大河内一男訳『国富論』中央公論社，1978年，全三巻。

[15] Steuart, Sir J., *An Inquiry into the Principles of Political Oeconomy*, London, 1767,
[16] 伊藤誠一郎「チャールズ・ダヴナントにおける統治と経済」『三田学会雑誌』85巻2号，1992年
[17] 大倉正雄「財政理論家としてのチャールズ・ダヴナント」(一) ～ (四)，『拓殖大学論集』，(一) から順に No.158，1985年，No.162，1986年，No.176，1989年，No.184，1990年。
[18] 佐々木力『科学革命の歴史構造』上，岩波書店，1985年。
[19] 佐々木力『近代学問理念の誕生』岩波書店，1992年。
[20] 中島秀人『ロバート・フック　ニュートンに消された男』朝日選書，1996年。
[21] 芳賀守『イギリス革命期の社会・経済思想』第三出版，1980年。
[22] 花田圭介『ベイコン』勁草書房，1982年。
[23] 松川七郎『ウィリアム・ペティ』岩波書店，上巻1958年，下巻1964年。
[24] 只腰親和『「天文学史」とアダム・スミスの道徳哲学』多賀出版，1995。
[25] Aston T., ed., *Crisis in Europe, 1560-1660*, London, 1965.
[26] Birch, T. R., *The History of the Royal Society of London*, in 4vol., London, 1756-7.
[27] Buck, P., Seventeenth-Century Political Arithmetic: Civil Strife and Vital Statistics, in *Isis*, 1977, vol.68, No.241.
[28] Butterfield, H., *The Origins of Modern Science, 1300-1800*, G. Bell and Sons LTD, London, 1957. 渡辺正雄訳『近代科学の誕生』(上) (下) 講談社学術文庫，1978年。
[29] Deane, P., political arithmetic, in *The New Palgrave: A Dictionary of Economics*, ed. by J. Eatwell, M. Milgate and P. Newman, in 4 vol., London, 1987.
[30] Deane, P., *The State and the Economic System*, Oxford University Press, 1989. 中矢・家本・橋本訳『経済認識の歩み』名古屋大学出版会，1995年。
[31] Dickson, P.G.M., *The Financial Revolution in England: A Study in the Development of Public Credit 1688*-1756, MacMillan , New York, 1967.
[32] Endres, A. M., The functions of numerical data in the writings of Graunt, Petty, and Davenant, in *History of Political Economy*, vol.17, no.2, 1985.
[33] Farrington, B., *Francis Bacon, Philosopher of Industrial Science*, London, 1949. 松川・中村訳『フランシス・ベイコン—産業科学の哲学者—』岩波書店，1968年。
[34] Fitzmaurice, Lord E., *The Life of Sir William Petty*, London, 1895.
[35] Hetherington, N.S., Isaac Newton's Influence on Adam Smith's Natural Laws in Economics, in *Journal of the History of Ideas*, vol.44, no.3, 1983.
[36] Hill, C., *Intellectual Origins of the English Revolution*, Oxford University Press, 1965. 福田良子訳『イギリス革命の思想的先駆者たち』岩波書店，1972年。
[37] Holmes, G., Gregory King and the Social Structure of Pre-Industrial England, in *Politics, Religion and Society in England, 1679-1742*, London, 1986.
[38] Hunter, M., *Science and Society in Restoration England*, Cambridge University Press, 1981.
[39] Hunter, M., *Establishing the New Science*, The Boydell Press, Woodbridge, 1989.
[40] Hunter, M., *The Royal Society and its Fellows* 1660-1700, The British Society for the History of Science, Preston, 1982.
[41] Jacob, J.R., Restoration, Reformation and the Origins of the Royal Society, in *History of Science*, no.8, 1975.
[42] Kargon, R., William Petty's Mechanical Philosophy, in *Isis*, vol.56, 1965.
[43] Kuhn, T.S., *The Essential Tension*, The University of Chicago Press, Chicago, 1977. 安孫子・佐野訳『本質的緊張』1，2みすず書房，それぞれ1987年，1992年。
[44] Letwin, W., *The Origins of Scientific Economics, Enlish Economic Thought 1660-1776*, 1963.
[45] Marx, K., *Zur Kritik der Politischen Oekonomie*, 1859.

[46] McNally, D., *Political Economy and the Rise of Capitalism*, 1988.
[47] Ochs, K.H., The Royal Society of London's History of Trades Programme: An Early Episode in Applied Science, in *Notes and Records of the Royal Sociey of London*, vol.39, No.2, 1985.
[48] Plumb, J.H., *The Growth of Political Stability in England, 1675-1725*, 1967.
[49] Roncaglia, A., *Petty-La Nascita Dell'Economia Politica*, 1977.
[50] Rossi, P., *Francesco Bacone, Dalla magia alla scienza*, 1957. 前田訳『魔術から科学へ』サイマル出版会，1970年。
[51] Scala, G.E., An Index of Proper Names in Thomas Birch, The History of the Royal Society, in *Notes and Records of the Royal Society of London*, vol.28, No2, 1974.
[52] Schumpeter, J. A., *History of Economic Analysis*, 1954, repr. 1976，東畑精一訳『経済分析の歴史』全7巻
[53] Shapiro, B. J., *Probability and Certainty in Seventeenth-Century England*, 1983.
[54] Skinner, Q., Thomas Hobbes and His Disciples in France and England, in *Comparative Studies in Society and History*, Vol.8, 1966.
[55] Sprat, T., *The History of the Royal Society of London*, for the improving of Natural Knowledge, London, 1667.
[56] Syfret, R.H., The Origins of the Royal Society, in *Notes and Records of the Royal Sociey of London*, vol.5, No.2, 1948.
[57] Thomas, K., *Religion and the Decline of Magic*, Penguin Books, 1985. 荒木正純訳『宗教と魔術の衰退』上・下，法政大学出版局，1993年。
[58] Turnbull, G. H., Samuel Hartlib's Influence on the Early History of the Royal Society, in *Notes and Records of the Royal Sociey of London*, vol.10, No.2, 1953.
[59] Waddell, D.A.G., Charles Davenant-A Biographical Sketch, in *The Economic History Review*, 2nd ser., vol.11, 1959.
[60] Wallerstein, I., *The Modern World-System 2*, Academic Press Inc., 1980.
[61] Westfall, R. S., *The Construction of Modern Science*, New York, 1971. 渡辺・小川訳『近代科学の形成』みすず書房，1980年。
[62] Westfall, R. S., *Never at Rest, A Biography of Isaac Newton*, Cambridge University Press, 1980. 田中・大谷訳『アイザック・ニュートン』平凡社，1993年。